

名古屋 文化情報

2021

Summer

No. 398

NAGOYA
Cultural
Information

Pick Up Gallery/ウエストベスギャラリーコヅカ
随想/佐藤文子さん(愛知県立芸術大学陶磁専攻准教授)
この人と.../からくり人形師 九代玉屋庄兵衛さん
視点/名古屋を盛り上げる武将たちの奮闘!
#zoom up/松岡伶子バレエ団プリンシパル 碓氷悠太さん



2021

Summer

表紙

晴れやかに上を向いて

(2021年/H97.0cm × W162.2cm
岩絵の具、水干絵の具、高知麻紙、親和金箔、墨)

この作品のテーマは『希望』です。コロナ禍が終息し、2021年が希望に満ちた年になるように願って描きました。揚羽蝶は願いの象徴です。晴れやかに上を向いて飛んで行きます。



さかきばら のぶ よ
榊原伸予

1965年 愛知県生まれ
1986年 名古屋造形芸術短期大学卒業(現・名古屋造形大学)
1987年 同校 専攻課程修了
2018年 松本静太郎賞受賞

美術団体 等迦会 会員
ウェブサイト <https://sakakibaranobuyo.com>

Contents

- Pick Up Gallery ウエストベスギャラリーコヅカ… 2
- 随想 青の都 ウズベキスタンやきもの探訪
- 佐藤文子さん(愛知県立芸術大学陶磁専攻准教授)… 3
- この人と… からくり人形師 九代玉屋庄兵衛さん… 4
- 視点 名古屋を盛り上げる武将たちの奮闘!…………… 8
- #zoom up 松岡伶子バレエ団プリンシパル 碓氷悠太さん… 10

「なごや文化情報」編集委員

- 上野 茂 (ナゴヤ劇場ジャーナル編集長)
- 杵屋六春 (長唄唄方 名古屋音楽大学講師)
- 鈴木敏春 (美術批評・NPO法人愛知アートコレクティブ代表理事)
- 瀧津清仁 (指揮者)
- 山本直子 (編集・出版 有限会社ゆいぽと代表)
- 吉田明子 (人形劇団むすび座 制作部長)

Pick Up Gallery



Gallery's Collection 2021 (2021年3月~4月)

ウエストベスギャラリーコヅカ

ウエストベスギャラリーコヅカは、1977年、個人で設立したギャラリーウエストベスからスタートしました。それから今日まで、この地域で活躍するアーティストの作品を中心に展示しております。また、名古屋の地を中心に発表活動をつづけているアーティストたちの作品、略歴、テキストを収録したオンラインライブラリ「Artist Index Nagoya」も運営しています。これからも、今日の美術に親しんでいただく機会をつくり、作品から放たれる優れた感性をどなたにも体感していただきたいと思っております。日常生活において豊かで穏やかな心を育む出会いになれば幸いです。

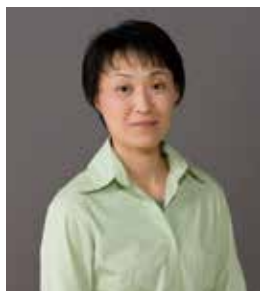
設立 1977年 支配人 小塚正和
住所 〒460-0002 名古屋市中区丸の内2丁目4-19
マリービル2F
電話 052-990-8777

取り扱い作家 清野祥一、小谷浩士、松井憲作、古川清
三浦篤正、鈴木淳夫、亀谷光路、田中恒光 ほか
ウェブサイト <http://kozuka.art758.com/?ja>

随想

青の都 ウズベキスタンやきもの探訪

—乾燥地帯での陶芸について感じたこと—



さとう ふみこ
佐藤文子（愛知県立芸術大学陶磁専攻准教授（公社）日本工芸会正会員）

愛知県立芸術大学大学院陶磁専攻修了。緑豊かな長久手市にて作陶活動。
東海伝統工芸展にて「東海伝統奨励賞」「愛知県教育委員会賞」「日本工芸会賞」を受賞。
名古屋、東京を中心に個展やグループ展を開催。

世界には、多様な文化を背景に、それぞれに特徴を持った陶磁器作品を生産するための窯業地が数多く存在しています。やきものを焼き上げるためのProcessや長石・石灰石・カオリン・含鉄土石や天然灰といった陶磁器をつくるための素材によって、各地域固有の多種多様なやきもの生産が展開されています。

私がシルクロードの要衝として繁栄したティムール朝時代の都市、ウズベキスタン共和国の古都サマルカンドを初めて訪れたのは、昨今の新型コロナウイルス影響前の2019年5月のことでした。東西の文化や品物が往来した地域であるサマルカンドは、装飾性に優れた青いタイルに飾られた建築物で街が築かれており、その“青”を象徴して「青の都」と呼ばれています。

鮮やかな青色の装飾タイル、施釉した煉瓦の立体装飾やモザイクタイル、彩画タイルなどで仕上げられた美しい建築物と乾燥地帯でのオアシス文化の魅力についてお伝えします。

ウズベキスタンのやきものは、乾燥地帯ならではの独自性をもった制作工程によって行われていました。砂漠で生育する塩生植物（地中の塩分を吸い込んで育つ植物）を焼いてできる植物灰と砂漠の砂を焼結することでできるガラスの塊を細かく粉

砕して、器物やタイルの表面をガラス粉で覆う制作方法を体感できたことや、青色を発現させるための絵の具である鉱石（コバルト鉱・ラピスラズリ・銅・マンガン等）を用いたタイル文様を理解することは、私にとって、これまでに自身が感じてきた陶芸観とは異なり刺激的な経験となりました。このような新しい知見を得られたことは大きな収穫であり、私にとっての新たな創作への可能性の蓄積となっています。しかしながら観光立国を目指すウズベキスタンでは、ソビエト統治時代を経て、近代化技術の導入により復興されたものの、それが同時にウズベキスタン独自の文化的背景を重視しない修復方法であったため、その起源となっている地域性豊かなやきものの製法は、ほとんどの技術が途絶えてしまっていました。技術を継承していくことの難しさと、規格化された材料に頼らざるを得ない環境であるということも実感することができた旅となりました。今後は、このウズベキスタン陶芸の伝統的な原料の精製法や焼成方法等を調査研究していくことにより、陶磁素材への理解を深めていきたいと考えています。海外への渡航が制限されているコロナ禍での制作活動ではありますが、魅力的な作品を制作し続けていけるよう前向きに取り組んでまいりたいと思っています。

この人と...



初代玉屋庄兵衛

祭りの山車の上で舞う人形は「山車からくり」。お茶を運んだり、弓に矢をつがえて的に当てたりする人形は「座敷からくり」。興行を目的として多くの人に楽しんでもらうのは「芝居からくり」。こうしたからくり人形が急速に発展したのは江戸時代初期から中期のこと。

1716（享保元）年に八代将軍となった吉宗は、幕府の財政再建のために厳しい倹約令を出し、庶民に質素倹約を強いた。一方、1730（享保15）年に七代尾張藩主となった宗春は、行き過ぎた倹約はかえって庶民を苦しめる結果になると考え、禁止されていた祭りを復活させ、歌舞音曲を奨励した。芝居小屋や遊郭などの遊興施設も許可し、江戸から尾張に移り住む人も出てきた。こうした背景があって、尾張にはさまざまな職人が集まってくるようになった。京都のからくり人形師であった庄兵衛も、その一人。

1733（享保18）年、東照宮祭の伝馬町の山車が「林和靖車」に新調された。中国の聖人 林和靖と鶴追い唐子からこがのる山車で、長い首を自由自在に動かして羽ばたく鶴が見もの。その鶴の操り方を指導するために、庄兵衛は京都から尾張にやってきた。翌年も東照宮祭の前に伝馬町から指導を依頼され、それを機会に名古屋城下の玉屋町に移住することを決めた。そして、町名にちなんで玉屋庄兵衛と名乗るようになる。

からくり人形師

く だい たま や しょう べ え

九代玉屋庄兵衛さん

からくり人形の世界へようこそ

名古屋市北区にある工房を訪ねたのは、コロナ禍が2年目に突入した春の終わり。ふだんは国内外を問わずからくり人形の展示や実演に忙しいのだが、昨年はそうした催しが中止になってしまった。しかし、今年は新型コロナウイルス感染拡大防止対策に万全を期して、4月から5月にかけて横浜高島屋ギャラリーで「からくり人形師 九代玉屋庄兵衛展—伝統の技と挑戦—」が開催された。名古屋でも2022年2月には同じ展示が行われる。
(聞き手:山本直子)

宗春の時代は、東照宮祭も年々華麗な山車行列になり、尾張各地で競うように匠の技を凝らした山車からくりがつくれるようになった。こうして、この尾張の地で、日本で唯一の人形師の家柄である歴代玉屋庄兵衛が脈々と歴史をつなぐことになった。



座敷からくりの一つ、弓曳童子 写真:老川良一

ものを作ることが好き

祖父六代、父七代玉屋庄兵衛が築いた名古屋市中区松ヶ枝町の工房兼自宅は、1945（昭和20）年5月の名古屋空襲で全焼している。後に九代となる高科庄次さんが生まれたのは、家族で疎開していた春日井。敗戦後9年が過ぎた1954（昭和29）年のことだった。その年に、家族は名古屋市内の御器所の借家に引っ越している。当時は、七代目が細々と人形の修理をしたり欄間や能面を作ったりして暮らしていた。仕事と生活の場が同じなので、幼いころから父の仕事を近くで見ていた。から



欄間を彫る中学生のころ

くり人形の衣装を着て遊んでいる2歳ころの写真も残っていたという。

父の仕事を手伝いはじめたのは中学生のころ。父の「やれ」という

一言がきっかけだったが、ものを作ることは好きだったので熱中した。中学卒業後は日本特殊陶業株式会社に就職。プラグを作る部署に配属されたが、流れ作業のために製品を作る過程の一部分しか担えないことから1年間で辞めて、その後は溶接、建築などさまざまな仕事を転々とした。喫茶店のバーテンダーをしていたこともある。このころの寄り道で溶接や建築、人との交わり方などさまざまな技を身につけることができた。

青春時代は遊びにも力が入った。七代目に事故を起こして死んでもらっては困ると言われ、車の免許を取ることは許されなかったため、公道を走らなければ免許の必要がないバギーに熱中した。少々の故障は自分で修理し、仲間と連れ立って海岸を走るの爽快だった。ほかにも、スキー、ビリヤード、ウインドサーフィンと趣味を広げ、仲間も増えていった。



喫茶店でバーテンダーをしていたころ

23歳で内弟子にもどる

1970（昭和45）年、江戸時代に時計やからくり人形について書かれた『機匠きこうずい図彙』にある茶運人形に、七代目が各種の改良点を加えて、玉屋庄兵衛モデルとして復元した茶運人形を、大阪万博ロケット館に展示した。それが話題となって、からくり人形が広く世間に知られることとなった。その後、高山や京都からの人形の修理の依頼が増えてきた。そのため兄とともに七代目の仕事を手伝うようになった。

1977（昭和52）年、23歳のときに内弟子にもどり本格的な修業がはじまった。七代目は非常に厳しく、最初もらった道具は小刀4本だけ。その使い方も手入れの仕方も見て覚えていくしかなかった。ある寒い日、小刀を研ぐのに桶に湯を入れて染をしようとしたところ、「鋼は寒いところで鍛えられる。湯を使うとはなにごとだ!」と厳しく怒られた。そして、そのことで鋼の特性を心に刻むことができた。

仕事は文化財の修復が中心で新しく何かを作ることはなかった。文化財の修復は責任のある仕事であり、時間も手間も膨大にかか

る。兄とともに修業に励んでいたが、当時は給料ではなく、小遣いももらっていた。

1981（昭和56）年、七代目が1300年の歴史を誇る京都祇園祭に、応仁の乱以前



七代目と修業中の若き九代目

から巡行していた大きなカマクリに乗せた御所車というユニークなとろろやま蟻螂山を、110年余を経て復活させた。それ以来、庄次さんが祇園蟻螂山のからくり操作を担当することになった。

八代目から九代玉屋庄兵衛へ

1988（昭和63）年、七代目が亡くなり、ともに修業していた兄が八代玉屋庄兵衛となった。八代目は伝統的な山車からくりの修復に加え、世界デザイン博の「名古屋市館橋弁慶人形」、三重県まつり博の「松尾芭蕉人形」、イタリア・ジェノヴァ国際博の「愛知県館人形三体」など、内外の博覧会において、コンピューター制御のからくりモニュメントを制作した。名古屋市若宮大通の「からくり人形時計塔三英傑人形」、名古屋港水族館の「浦島太郎伝説」、万松寺の「からくり信長人形」なども八代目の手によるものだ。

1995（平成7）年3月、八代目は「玉屋の歴史はお前が継いでいけ」と、弟庄次さんに名跡をゆずり、自らは萬屋仁兵衛を名乗って、創作からくりに専念することになった。庄次さんはその2年前、1993（平成5）年に、青春時代をともに楽しんだ仲間の一人と、当時はまだ珍しかったが、ハワイのマウイ島で親族だけの結婚式を挙げていた。そして、結婚後はバギーもスキーもやめて仕事に専念していた。九代目を継ぐことで、長い修業時代が終わった。

ところが、兄は創作からくりに専念しようとした矢先に病で亡くなった。萬屋仁兵衛の襲名披露が偲ぶ会となってしまったのだ。



工房での九代目

九代玉屋庄兵衛として

からくり人形は、江戸時代以来、多くの庶民に親しまれた木製の自動人形といえる。しかし、人間そっくりの動きを目的としているわけではなく、人々に見てもらい喜んでもらうことが本質となっている。ロボット開発が進み、人間といかに共存していくかが課題となるが、そのヒントをからくり人形に見出すこともできそうだ。ここでも、九代玉屋庄兵衛の果たす役割は大きい。2001（平成13）年8月には、犬山のからくり人形カラス天狗と二足歩行ロボットASIMOが鈴鹿サーキットで競演している。



二足歩行ロボットASIMOと握手

また、国際交流基金日本文化紹介派遣事業として、2004（平成16）年には、イギリス、フランス、イタリア、モロッコ、2008（平成20）年には、オーストラリア、2011（平成23）年には、カナダ、ポルトガル、ドイツ、チェコ、ルクセンブルクを訪ね、からくり人形の展示や実演を行ってきた。近年では日本の伝統技術の一つとして海外での注目度も高まっている。

山車からくりの復元は、人形の顔も衣裳もかつてと変わらない状態に仕上げなければならない。愛知県には400近い山車があるため、復元の依頼も多い。確実に復元するため



祇園蟻螂山の大蟻螂を修復

には、山車を持っている町内の人たちからしっかり情報を得ることも必要となる。工房にこもっているだけでなく、依頼を受けた町内へ出かけて行ってのお付き合いを大切にしている。もちろん、町内の方々に納得してもらえるように修復技術も磨かねばならない。代々続いている技術なので、必ず先代と比較され、先代以上のものを求められることも肝に銘じている。

林和靖車の鶴の復元

京都の人形師庄兵衛がつくった東照宮祭の林和靖車の鶴は、戦争末期に空襲で焼けてしまった。名古屋に空襲はないだろうと言われていたが、名古屋城も、その周辺もすべて焼け、多くの文化財を失った。七代目は戦後、各地のからくり人形を数多く修復し、「萬人形帖」を残した。また、初代庄兵衛が尾張に住むきっかけとなった、林和靖車の鶴の復元も大きな課題だった。

七代目の意志を継いで、九代目も林和靖車の鶴の復元に取り組んだ。東照宮祭は、いまは行われていないが、名古屋市博物館に詳細な映像が残っている。鶴が出てくるのはわずかな時間だが、口の開け方、首の動きや羽ばたく様子も目で確認することができる。七代目の残した「萬人形帖」とあわせて、復元の貴重な資料となった。

取材の日は横浜高島屋ギャラリーでの展示のために、ふだん工房にあるからくりや道具はほとんどが出払っていた。ただ、1羽、大きな鶴の姿があった。これが七代目と九代目の大きな夢であった林和靖車の鶴だった。首が動き口も開く。羽根もふわふわと羽ばたく。初代の鶴が九代目の手によってよみがえったのだ。

鶴がふわふわと羽ばたく様子を表すために、鶴の骨格を研究し、東山動物園に鶴の動きを観察しに行ったこともある。そのとき、鶴の羽根も手に入れた。が、結局、実際の羽根が役に立つことはなかった。ふわふわと羽ばたく羽根の芯に使われているのはクジラのひげだ。



九代目の手によってよみがえった東照宮祭の鶴

文化財の復元は材料から

文化財の復元は当時と同じ材料を探すことから始まる。しかし、人形の心棒に使うアカガシが日本ではとれなくなった。サクラやコクタン、ツゲも手に入りにくい。戦後、外材が入るようになって林業は大幅に衰退してしまったのだ。

そもそも木が文化財の復元材料として使えるようになるまでには、膨大な時間がかかる。切り倒して、海水と真水が交わる貯木池に入れ、ヤニを出す。水からあげて製材して何十年とかわかす。そうしている間に人間のほうの世代が代わってしまう。

それでも、日本全国の木は岐阜県と愛知県に集まってくる。材木屋では「製材してから何年?」と確かめながら仕入れることになる。若い木を使えば、復元しても1年で壊れるようなものしかできないからだ。

鶴の羽根のようにバネの役割で使うのがクジラのひげ。ひげといっても、実際にクジラにひげがあるわけではない。セミクジラの口の中に700枚もついているこし器のことで、アコーディオンカーテンのようになっていていちばん奥がいちばん長い。このひげをどうやって手に入れるのか。

クジラをとる漁師は、魚拓の代わりに、いちばん奥の長いひげを床の間に飾る。しかし、代が代わると価値が伝わらず売却されることになる。それを手に入れるのが唯一の方法だが、骨董価値があるものなので安くはない。それでも文化財の復元には欠かせないので、声がかかったときに入手するようにしている。



協力してクジラのひげを切る七代目と母

好きなことをやれ

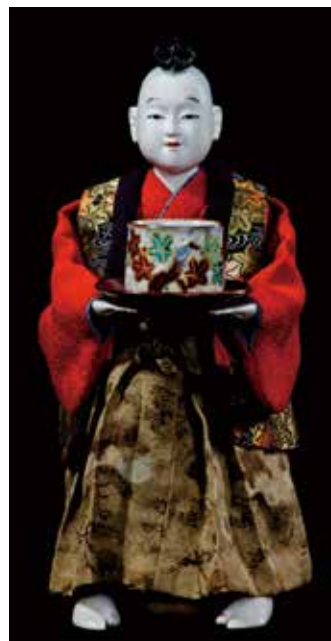
からくり人形師として代々続いている家柄は、日本で唯一、玉屋しか存在しない。九代目の次はどうするのか。息子には「好きなことをやれ」と言ってきたという。それは「自分が好きなことをやってきたから」と、説得力がある。九代目は先代、先々代と比べられ、それ以上の技術を求められる厳しい世界で、もの

を作ることが好きだからこそ生き抜いてきた。だから、「好きでもないので継ぐことはない」と言い切ることができたのだ。

4年ほど前、高校を卒業した息子が「やりたい」と言った。富山の知り合いのところへ修業に出して、帰ってきて2年になる。修業は始まったばかりといえる。最近のことだが、1年に何体か作る茶運人形や弓曳童子などは、もう1体作って工房に置くことにしている。見本があれば、次の代が参考にできると考えてのことだ。

からくり人形は、人形師だけでその世界を支えているわけではない。材料となる木にしても、クジラのひげにしても、いいものが入ったときに声をかけてくれる仲間がいる。人形の衣裳は七代目のころは母が、八代目のころは兄嫁と妹が、今は妹と、家族で作っている。1999（平成11）年に新しく自宅兼工房を建てたが、これは妻の家族に理解があったからできたことだという。

好きなことに本気で取り組むことによって、支えとなる人たちの輪ができて、玉屋庄兵衛の歴史はこれからも脈々と続いていくにちがいない。



年に数体作ることもある茶運人形
写真:老川良一



茶運人形の構造
写真:老川良一

IMASEN犬山からくりミュージアム 玉屋庄兵衛工房

犬山祭の山車からくりの修復は九代玉屋庄兵衛の手によるところが大きい。2003年に「乱杭渡り」を完全修復した魚屋町真先、2006年に修復を終えた熊野町住吉臺。こうした縁もあって、犬山には山車からくりで使われた人形や座敷からくりを展示したからくりミュージアムがある。人形の操作の実演も見ることができ、九代玉屋庄兵衛が制作風景を公開している日もある。

住 所：愛知県犬山市犬山北古券8

交 通：名鉄犬山駅 西口より徒歩約15分

入館料：300円（中学生以下は無料）

休館日：年中無休（年末年始を除く）

名古屋を盛り上げる武将たちの奮闘!

～コロナ禍で模索する観光地の新たなおもてなしのカタチ～

いまや全国に80を超える団体が活躍しているといわれる武将隊。その地ごとに、ゆかりの戦国武将が現代によみがえり、国内外から訪れた観光客を“おもてなし”する趣向が好評を博している。その先駆けといえる「名古屋おもてなし武将隊[®]」を中心に、それぞれ個性的な武将隊が名古屋の魅力発信に奔走中。コロナ禍で苦戦を強いられる観光地や商店街を盛り上げるために奮闘している彼らの姿に焦点を当て、今後の展望とともに紹介する。

(まとめ：杵屋六春)

武将隊の先駆け「名古屋おもてなし武将隊[®]」

2009（平成21）年、名古屋開府400年に合わせて名古屋の観光PR隊として結成された「名古屋おもてなし武将隊[®]」は、名古屋を「世界一の観光都市にすること」を使命として400年の時を超え織田信長、豊臣秀吉、徳川家康、前田利家、加藤清正、前田慶次ら名古屋にゆかりのある6人の武将と4人の足軽にて結成。名古屋城での演武を中心に様々な活動を展開している。

名古屋市内各地に出陣し、さまざまなイベントを盛り上げている。筆者も毎年出演する「中村公園 太閤花見茶会」にも、中村区出身・太閤殿下こと豊臣秀吉が出陣し、来場者を楽しませている。さらにテレビやラジオのレギュラー番組を持ち、幅広くPR活動に励んでいる。

ところが、コロナ禍でイベントは次々と中止に追い込まれ、一時期は活動拠点である名古屋城にさえ登城できない日々が続いたため、新たな活動の形態を模索し、活動の主軸をオンラインに切り替えることにした。YouTubeやVimeo配信、Twitter、SHOWROOMやTikTokなど、これまでとは違う形で観光PR



©2009 Nagoya Omotenashi Busho-Tai Secretariat

を続けた。現在もオンラインでの活動を継続しつつ、毎日名古屋城で来場者を迎え、毎週土曜日には演武を披露している。し

かし、いまだに10人全員での名古屋城での演武披露はできていない。ここで、徳川家康からのメッセージを紹介する。

「我等の時代から変わらぬは、繋がりが大切である事。それに加え、今の世では多様な繋がりの中で其々が生きる所以^{ゆえん}や希望を見いだすことが肝要なり。直に会うて総てを済ませるばかりでなく、文明の利器も味方につけ、共に生きて参ろうぞ。然ればと云って元気が欲しくば我等に会いに名古屋城へ参れ!」

10人揃っての迫力のある演武を見られる日を楽しみに待ちたい。

円頓寺商店街を盛り上げるカブキカフェ「ナゴヤ座」



2016（平成28）年に設立、21年に5周年を迎えた「ナゴヤ座」。武将隊とはまた違った切り口で観光や商店街の活性化に一役買っている。

常設の芝居小屋を名古屋市西区の円頓寺商店街の真ん中に設け、歌舞伎の形態を用いて新たなエンターテインメントを創造。毎週、水・金・土・日に公演を行っている。出演しているのは戦国三大美男子とも称される名古屋山三郎を中心とした「名古屋山三郎一座」。メンバーは10名で構成されている。歌舞伎の「白浪五人男」「勸進帳」「鳴神」「東海道中膝栗毛」「丹下左膳」、さらには「西遊記」、シェイクスピアの「マクベス」など洋の東西を問わず古典の名作を下敷としたスピード感あふれる作品を上演している。

毎回40席のチケットが全公演完売に近い状態。リピーターも



多く賑わいを見せたナゴヤ座だが、コロナ禍の現在は、劇場ガイドラインに基づき約半分の客席数で上演している。

同座では「演劇のある生活を絶やしたくない」と、毎週水・土の夜公演をYouTubeにて全幕無料配信。名古屋山三郎一座座長・名古屋山三郎は「ナゴヤ座では現在、感染拡大防止対策を行いながら演劇の上演を毎週行なっています。YouTube配信でも無料で公演をご覧になれますので、ぜひナゴヤ座の『ナゴヤカブキ』をお楽しみください。またいつの日かすべてが元に戻った際にはナゴヤ座に遊びに来てください。心よりお待ちしております」と語る。

満席の観客を迎え、熱のこもった舞台が見られる日が待ち遠しい。

名古屋城下の新スポットとともに誕生した「徳川義直、宗春と忍び衆」



2018（平成30）年、名古屋城下「金シャチ横丁」の誕生とともに結成されたグループ「徳川義直、宗春と忍び衆」。

藩祖義直と七代藩主宗春が、尾張名古屋の歴史・文化を未来へつなぐ伝承者として現代によみがえった。二人の藩主の護衛をつとめる忍者・服部半蔵保長ら9人とともに、なごやめしや、名古屋土産を取り揃えた商業施設「金シャチ横丁」のステージで、誰もが足を止めて楽しめるショーを繰り広げ、来場者を楽しませている。コロナ禍以前は、日・祝日を中心に1カ月に4～5日程度「ステージショー&おもてなし行列」を開催していた。様々なイベントに出演し、宗春生誕月である11月の「宗春花魁道中」

など時節に合わせたイベントを開催し賑わわせた。

コロナ禍の感染拡大防止対策のため、ショーの短縮や日程の変更を余儀なくされているが、来場できない観光客向けにショーの様子や金シャチ横丁の今をツイキャストで生配信している。一度目の緊急事態宣言時(2020年4～5月)には休むことのできない官公庁や警察署、病院などソーシャルワーカー向けに、金シャチ横丁のテイクアウトメニューを届ける「忍者デリバリー」を緊急実施。忍び衆がバイクや自転車宅配を行う独自の活動も行った。

宗春からは「金シャチ横丁では、わしらが華麗な舞いや大胆なアクロバット忍術で賑やかにおもてなししておるぞ。演武と共に名古屋のうまし飯も楽しめる金シャチ横丁で待っておるぞ。コロナ禍ではあるが、互いに感染を広げぬよう注意を払い、相見えようぞ!」とのメッセージが寄せられた。



写真はマスク姿の花魁道中。マスクを取り笑顔で練り歩くことが出来る日が楽しみだ。

苦境の中で模索する観光へのおもてなし

コロナ禍の苦境のなかでも、それぞれの団体が奮起している姿を紹介した。SNS発信や動画配信など様々な工夫で、来場者やそうでない方も楽しませようとする姿勢には心を打たれた。

コロナ禍が収束した暁には、さらにエネルギーな活動を見せてくれることだろう。その日が待ち遠しい。

#zoom up

ズーム・アップ

松岡伶子バレエ団 プリンシパル

うすい ゆうた

碓氷 悠太さん

バレエ界には「ダンスール・ノーブル」という言葉がある。いわゆる「王子さまタイプ」の男性ダンサーを指す言葉で、長身でスリム、気品ある雰囲気、ヒロインの相手役となる優れたダンサーのことである。近年では男性バレエダンサーも注目されるようになり、男子専門のコースを設けるバレエ教室も出てきた。そこで「バレエ都市、名古屋を代表するダンスール・ノーブル、松岡伶子バレエ団の碓氷悠太さん（1983年生まれ、名古屋市出身）をズームアップ！

（聞き手：上野茂）

理想のバレエを求め米国、カナダへ留学

—碓氷さんが最初にバレエの手ほどきを受けたのは故・仁科伶子先生だったそうですが、バレエを始めた切っ掛けは？

「僕は幼少期、体が弱くてよく風邪を引きました。そこで母は、むかし自分も習っていたバレエをやらせてみよう、見学に連れて行ったそうです。そしていくつかの教室を見学した後に、仁科伶子バレエ団に在籍することになりました。その理由は、男性の先生がいたからだと聞きました。男子生徒は自分一人でした。今ではバレエ教室に男の子がいることは決して珍しくはありませんが、僕の知る限りでは、名古屋で自分と同世代のバレエ男子は越智友則くん、清水健太くんの二人しかいませんでした」

—当時の碓氷さんを見てみたいものですね。そして16歳の時、碓氷さんはスイスのチューリッヒダンスアカデミーに短期留学をされています。

「ローザンヌ国際バレエコンクールに出場するため、1カ月前半にスイス入りし、現地の雰囲気慣れるために、チューリッヒダンスアカデミーで勉強させていただきました。コンクールの数年前、仁科先生がスイスからマリー・フェナローリという先生を招いて国内のいくつかのバレエ教室で講習会を開いたことがありました。それがきっかけでコネクションができ、チューリッヒにも行くことができました。初留学の自分にとって、異国の地で生活し、バレエを学ぶことはとても新鮮でした。バレエに関してはメソッドの違いこそありましたが、適応するのにそれほど時間はかかりませんでした」



2011年「白鳥の湖」(伊藤優花さんと)

—当時から国際感覚を備えていたわけですね。その後サンフランシスコバレエスクール、カナダナショナルバレエスクールに留学されましたが、具体的な目標があったのですか？

「当時の自分はバレエ歴も浅く、古典バレエ以外に触れる機会はほとんどありませんでした。ジョージ・バランシンの作品を知ったのはその頃です。こんな斬新なバレエが世の中にはあるんだと、強烈な印象を受けました。留学先に米国を選んだのも、本国でバランシンスタイルを学びたいと思ったからです。ところが渡米した2日後に9・11同時多発テロが起きました。学校から連絡があり、屋外へは出ないように言われました。すぐさま仲間と食料の買い出しに行ったことを覚えています。市庁舎や政府機関も近くにあり、標的になるのでは…と不安な日々が続きました。しばらくしてサンフランシスコバレエスクールでのスクールライフが始まるのですが、自分が入学した頃の学校は全寮制ではなかったため、ホームステイ先から学校の近くのアパートに移り、そこから通うことになりました。8学年クラスがあり、7年生として入学することになりました」

—米国の歴史的イベントを目の当たりにしたわけですね。バレエ修業はいかがでしたか？

「レッスンは気も引き締まり何より刺激的でした。初めてのボーイズクラスにパ・ド・ドゥクラスも未経験だったので、メソッドの違いや言葉の壁、慣れないことばかり。最初の頃は付いていくのが大変で、毎日ヘトヘトでした。充実した環境の中でただひとつだけ希望と違っていたのは、サンフランシスコバレエスクールの講師陣の中にバランシンスタイルを継承する先生が一人しかいなかったことでした。せっかく渡米したのだから、バランシンメソッドを学びたいと思い、新しい環境を探ることになりました」

—バランシンは、古典バレエとネオクラシックを混在させた革新的な振付家でした。そのバランシンを学びたいという碓氷さんの強い思いが伝わります。

「次にボストンバレエスクールとカナダナショナルバレエ

スクール、2校のオーディションを受けました。幸運にも両方に合格することができましたが、やはり決め手になったのはバランシンメソッドでした。ナショナルバレエスクールでは担任が決まっており、元ニューヨークシティバレエ(NYCB)プリンシパルのリンゼイ・フィッシャー先生が就くということだったのでカナダに行くことにしました。カナダでの生活が始まりましたが、トロントでの冬はそれまでに経験したどの冬よりも寒く、11月から4月まで雪が降り続きました。ほとんど毎日降っていたために日照時間が短く、雪国の生活に慣れていなかったこともあり、精神的に落ち込んでしまいました。学校のカリキュラムはピラティスからフロア・バー、バリエーションクラスにパ・ド・ドゥまで充実していました。バランシンメソッドのクラスではアレグロ(テンポの速い)ステップが多く、苦手意識があり戸惑いましたが、これを学ぶのも目的の一つだったので、今となってはいい経験になりました。」



2013年「ロミオとジュリエット」
(早矢仕友香さんと)



2016年「シンデレラ」

恩師・石井潤氏(振付家)への思い

一帰国後の2003年に松岡伶子バレエ団に入団されましたが、その理由は?

「留学を終え帰国した頃、次の目標も決まっていなかったので、地元名古屋のコンクールに出場することにしました。そこで久しぶりに松岡伶子先生にお会いしました。小さい頃コンクールに出ていた僕のことを覚えていてくださって、今レッスンはどうしているの? うちのバレエ団にロシアから先生を呼んでレッスンしているからいらっしゃいと声をかけていただきました。所属もなかった自分にとってはとてもありがたく、すぐレッスンを受けに行きました。そこでワジム・グリャーエフ先生とナターシャ・ポリシャコフ先生に出会いました。この二人から、もう一度本格的なワガノワメソッドを習いたいと思ったこと。直感的にこの人たちに付いて行けば間違いないと思えたことが入団を決意した理由です」

一これまで多くのグランドバレエに出演されてきましたが、最も印象に残っている作品、その理由は?

「新国立劇場バレエ団で初めて舞台上に立たせていただいた『カルメンby石井潤』です。潤先生とは松岡伶子バレエ団の公演で初めて作品に関わらせていただきました。潤先生はその佇まいからは想像もつかないほど情熱的でロマンチストで

した。それは作品を通してすぐに分かりました。舞台演出の手法やアンサンブルの造形美、役の表現に至るまで、こだわりが強く一切妥協しません。同作は2008年3月に新国立劇場中劇場で上演されました。リハーサルは1月から始まり、午前のバレエクラスが終わると少し昼休憩がありリハーサルに移ります。当時まだ松岡伶子バレエ団でも主役としての経験のなかった自分にとってはいきなりの大役で、引き受けたものの任された役割りを果たせるか不安でした。その後も潤先生の作品には何作か携わらせてもらいました。今の自分があるのも潤先生の作品たちに育ててもらったおかげだと思っています」

一最後に、今後の展望を聞かせてください。

「ダンサーとして第一線で踊ることから、後進の育成や様々な企画をプロデュースする仕事へ、今はその転換期だと思っています。もちろん体が動く限り踊ることをやめるつもりはありませんが、新しい仕事にも面白さや、やり甲斐を感じています。2019年に企画を立ち上げた『NAGOYA ballet dance Gala』(NAG)は早くも3年目を迎え、今年も9月24日、名古屋市昭和 문화小劇場で開催します。NAGを発足したきっかけは、大人バレエ、にフォーカスした舞台が中部地域になかったことです。大人になってから趣味でバレエを始めた人、進学や就職でバレエを一度中断、



NAGオープンクラス



再開された方たちのために一、そんな思いで企画を立ち上げました。『体験を楽しむ』をコンセプトに様々な企画を提案し、すでに実現したものもあります。メイクアップセミナーや食育セミナーなど、各分野の専門家たちとコラボし、皆が楽しめる企画を形にする仕事をして行きたいと思っています。また2021年からスタートしたNAGオープンクラスでは、パーオソルクニアセフメソッド®を取り入れ、バレエ以前の体の基礎づくりから始めるなど多方向からアプローチ。バレエクラスにおいても、フラフープなどのアイテムを使用し受講者が感覚的にコツをつかみやすくする工夫をしています。今の夢は、この企画が大きくなり発展して行った先に大人バレエだけではなく、今後の中部バレエ界を担う世代の育成も視野に、新たなステージを創造したいと考えています。必ず実現します!」

一素晴らしいプランをすでに実践されているんですね。名古屋のバレエ界の新世代リーダーとして、一層のご活躍を期待しています。

なごやの文化を 褒められると、 うれしい。



名古屋市文化基金
Nagoya Culture Fund

わたしの寄附で、土を耕す。 わたしの寄附が、文化になる。

名古屋市観光文化交流局
文化歴史まちづくり部文化振興室
TEL: 052-972-3172

ご寄附のお問い合わせ
名古屋市文化基金 Eメールアドレス
a3172@kankobunkakoryu.city.nagoya.lg.jp

公益財団法人
名古屋市文化振興事業団
TEL: 052-249-9390

詳しくは、市公式ウェブサイト内 **名古屋市文化基金**

名古屋市



頼もしい味方をお探しですか？



集客・販促プランナー



アートディレクター



印刷コンサルタント

駒田印刷株式会社 TEL(052)331-8881

〒460-0021 名古屋市中区平和2-9-12 <http://www.kp-c.co.jp>

WE MAKE YOU MOVE
感動をあなたへ

20Hz ← → 20kHz

この領域を超えて最高のパフォーマンスを。



舞台音響／映像設備
設計・施工・保守・特注品製作・業務用機器販売

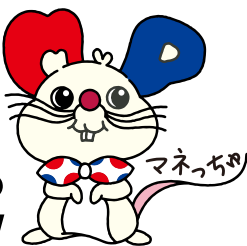
お客様に寄り添った先進のAVシステムを提案する
株式会社 エーアンドブイ
〒464-0846 愛知県名古屋千種区城木町二丁目98
TEL/052-761-5400 FAX/052-761-0909

公演・発表会の受付から制作業務全般まで、何でもご用命ください。美術展の受付も対応いたします。

業務内容

- ①舞台の企画・制作マネジメント
- ②イベントの企画制作
- ③芸術団体のコンサルティング
- ④舞台・イベントの運営

MANAGEMENT PRO
株式会社 マネージメント・プロ



〒461-0004 名古屋市東区葵2-11-22 アバンテージュ葵ビル301
TEL:(052)508-5095 FAX:(052)508-5097 Web:www.mane-pro.com

「ナゴヤ劇場ジャーナル」ではサポート会員を募集しています。

ナゴヤ劇場ジャーナル

- ◎年間6,600円で毎月お手元にお届けいたします。
- ◎毎月24,000部発行
- ※東海地方の演劇・バレエ・音楽公演、ホール、DM等にて配布

E-mail: mane-pro@mane-pro.com